

# ブラックバス防除でよみがえった里山ため池と小川の魚たち

君島裕介・君島奈々恵・高橋清孝（NPO 法人シナイモツゴ郷の会）

## はじめに

シナイモツゴ郷の会では、品井沼が模式産地であり、宮城県の地名を冠する唯一の魚類であるシナイモツゴをはじめとした里山の環境保全に取り組んでいる。

当会では1990年代に旧品井沼ため池群に侵入したブラックバス（オオクチバス、以下「バス」という）の防除を実施し、約10年かけて全てのため池から一掃した。その取り組みの手法や確認された効果について紹介する。

## 鹿島台の里山ため池と小川の源流

かつて鹿島台を含む広大な一帯に品井沼が存在していた。その面積は湖沼としては宮城県最大であったが、治水工事や水田化によりやがて1940年代に消滅した。沼の消滅前の1930年、京都大学の宮地氏によって、シナイモツゴは品井沼を模式産地として新種記載された。この頃までシナイモツゴは大量に漁獲され、食用利用されていた。その後、シナイモツゴは宮城県下で長らく確認されなかった。

沼の消滅以前から周辺の住民達は、品井沼から獲った魚を近隣の里山ため池に放流し、保存食として利用してきた。そのため、沼の消滅後もこれらのため池群とその下流の小河川が、かつての品井沼に由来する魚類達にとっての代替環境となり、1993年に再発見されるまでシナイモツゴをひっそりと育ててきた。

## バスの侵入とその影響

バスはスポーツフィッシングの対象として人気であったため、愛好家による移植等で1970年頃から急速に生息域を日本中に拡大した。1996年頃から里山ため池周辺でもバス釣りが流行し、ため池で繁殖したバスが下流の河川に流出し、地域一帯の生態系に大きな影響を与えた。

2001年に実施した調査では、当会が自然再生活動を展開している15ヶ所29個のため池のうち9ヶ所19個（66%）でバスの生息を確認した。アクセスの容易な幹線道路の近くでは、全てのため池にバスが侵入していた。バスが侵入したため池では小型の魚類は確認されず、大型のコイやフナ類のみが採捕され、バスの強い捕食圧による生態系被害が推測された。

幸いな事に、アクセスの難しいため池ではバスの侵入は無かったため、シナイモツゴや在来の魚類が完全に絶えることは無かった。

## 防除の手法

2002年にバスが侵入したシナイモツゴ生息池において初めて、池干しによる防除を実施した。地引網によって採捕した魚類を仕分けたところ、バス以外にシナイモツゴ、ギバチ、メダカが確認された。バス以外の魚は別所で一時保護した後、再び池に戻した。これ以降、地域住民が主体となって当会が支援しながら池干しによる防除を継続的に実施し、2015年までに全てのため池からバスを一掃した。

ため池は元々不安定な小水域であることやバスの再放流等のリスクを考慮し、地域住民と協議して近隣のため池から別のため池にシナイモツゴの移植放流を行う事で、生息地の拡大を行った。これらは、危険分散や遺伝的多様性の確保のためにも必要であると考えられる。

## 防除による魚類相の変化

池干しによるバス防除が実施されたため池群から干拓された旧品井沼へ注ぐ河川では、バスの侵入～

防除に伴って、最近 20 年間に魚類相が大きく変化している。

1993 年、シナイモツゴ再発見当時はこれらの川ではフナ類やオイカワ、モツゴ、タイリクバラタナゴといった小型の魚類が大量に生息していた。

1996 年以降になり、里山ため池にバスが侵入し繁殖をするようになると、その下流の河川でもバスがみられるようになり、遂には河川の上流部まで生息が確認されるようになった。すると、侵入後に実施した調査ではモツゴ、タイリクバラタナゴ等の小型魚類やエビ類が稀にしかみられなくなった。

その後、上述の通り 2002 年から池干しによるバス防除を実施した結果、バスの生息地は上流部から順次消滅した。2007 年から始まった子供たちによる生き物調査によると、2009 年以降、バスは下流域最下段の農業用取水堰上流で確認されていない。その後の観察会では、多くの小型魚類やエビ類に混じって成長したゼニタナゴが採捕されるなど、里山本来の魚類相を取り戻している。

## Conservation of fish by black bass control in rural area of Kashimadai

Yusuke KIMIJIMA, Nanae KIMIJIMA, Kiyotaka TAKAHASHI

(Society for Shinaimotsugo Conservation, SSC)

### Abstract

SSC is working to conserve the environment of rural area, including Shinaimotsugo (*Pseudorasbora pumila*). A survey conducted in 2001 confirmed the presence of largemouth bass (*Micropterus salmoides*) in 19 of the 29 ponds (66%) where we are conducting nature restoration activities. The first bass extermination by pond drying was conducted in 2002. Since then, extermination has been conducted continuously by local residents, and by 2015, bass were cleaned out of all ponds. In addition, considering the risk of re-release of bass, transplants and releases of rare freshwater fish were carried out to diversify the risk. As a result of the bass eradication program, the original fish fauna has been restored in the river downstream of the pond.

### 引用文献

- 1 鈴木光太郎 (2018) 旧品井沼に生きた魚類と漁法及び跡地周辺沼川に残る魚類の比較、2018 年水辺の自然再生共同シンポジウム講演要旨、  
[https://www.shinaimotsugo.com/ivent/yousi/yousi\\_2018\\_10/224.pdf](https://www.shinaimotsugo.com/ivent/yousi/yousi_2018_10/224.pdf) .
- 2 五十嵐義雄・高橋清孝 (2017) 地域住民の証言 大正～昭和初期に品井沼で捕った魚をため池へ毎年放流した！. よみがえる魚たち, 高橋清孝 (編)
- 3 高橋清孝 (2023) 変わりゆく里山水辺の原風景 外来種による破壊と防除による復元、2023 年水辺の自然再生共同シンポジウム講演要旨集.
- 4 高橋清孝・門馬喜彦・細谷和海・木曾克裕(1995): 模式産地におけるシナイモツゴの再発見と人工繁殖試験, 宮城県内水面水産試験場研究報告, 2: 1-9.